

## 諦めと絶望

第11期 OG 蓮岡 聡美

2015年、私の中でいろいろと心境の変化があった。いろいろを書き始めるとあまりにも長くなりそうなのでここでは割愛するが、結論だけを述べると、2015年、私は、大学院への進学を止め2度目の4年生活を



6月に開催された第11期会@二子玉川（著者は中央）

をまっとうな文学部生として過ごした。この1年にタイトルをつけるなら「諦めと絶望」というタイトルが一番しっくりくる。こんなことをいうと、この1年、蓮岡はさぞ辛かったのだろう、と思われるかもしれない。しかし、「諦めと絶望」と表したわりには、辛いことばかりではなかった。確かに、就職活動期には、一部の同期を除きみんな卒業してしまっていたため、就職活動に関する情報を収集することに苦労した。

試験期間には、4年の文学部生に友達がい

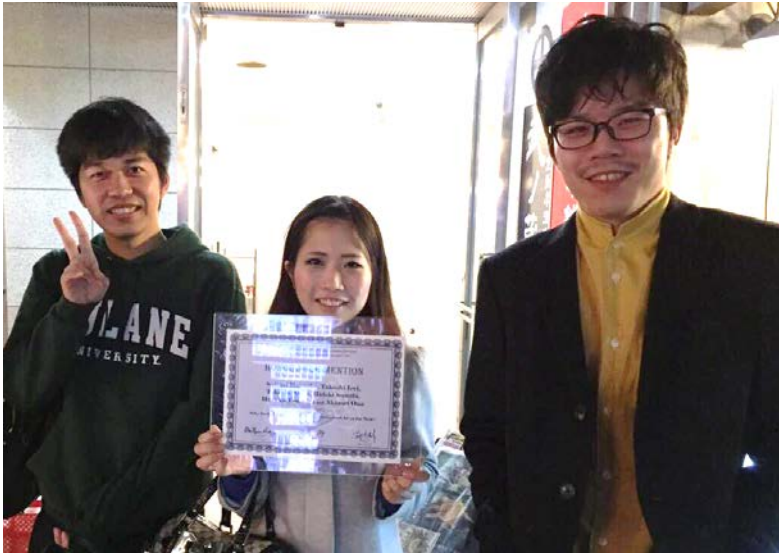
ないため、シケタイを集めることにも苦労した。なんでこんなことをしているのだろう、と幾度となく思った。1度決めた大学院への進学を諦め、自分の人生をどのように紡いでいけばいいのか、と絶望の中で1から考え直し、就職活動をしてきたわけであるが、喉もと過ぎれば熱さ忘れる、とでもいうのか、不思議とそんなに辛いことばかりでは

なかったと思える。それはやはり、私が行き詰ったり悩んだりしたとき、同期、とりわけマケ論のメンバーが傍に居てくれたからであると思う。

結局今年もマケ論のことを書くのかよ、とつつこみを受けそうだけれども、やっぱり私が書くことはマケ論のメンバーのことである。小野ゼミ



11月、ICAMAでの発表当日、第11期内藤さんとともに



ICAMA でいただいた学会賞の盾を、同期住田さんに贈呈  
(撮影：佐藤和也さん)

卒業後も、留年仲間の伊礼や内藤とは、よくご飯に行った。住田は社会人になったけれども、お腹がすいたり、お金がなかったり、Web テ受けて欲しかったり、ES 添削して欲しかったり、悩んで行き詰ったりした時は、彼の仕事の都合はお構いなしに三田に召集した。はるぼんが長野から戻ってきたときには、マケ論メンバーみんなでピザパをした。小野ゼミを卒業してからも、こうして昔と変わらず

みんなとわいわいできるからこそ、「やっぱり私は小野ゼミに入ってよかったなあ」と思える。

戻ってこられる場所があるから、「諦めと絶望」の1年もこうして乗り越えられたのだと思う。小野ゼミでがんばったことを言い続けた就職活動。内定先の最終面接で、「マケ論メンバーみんなの短所と長所を教えてください」なんて言われたけれども、窮することなく答えられた。みんなの良いところも悪いところも、なんだって言えるから、みんなも弱ったときは蓮岡のところに戻ってきて欲しい。三田には帰ってこられる場所を用意できなかったけど、笑って許してね。



春学期の納会にて、論文代表としての悩みを打ち明けた  
第13期生の劉の相談に親身につけてくださった著者